

## 略年譜

- 1871年(明治4) 2月21日、魚津町に生まれる。
- 1885年(明治18) 富山県中学校に入学。
- 1886年(明治19) 上京。この年か翌年に英吉利法律学校に入学。以後、数年間、弁護士試験を受けるも失敗。
- 1894年(明治27) 新聞社に入社。
- 1896年(明治29) 小作人事情調査のため魚津に帰郷。翌年、魚津から北陸路を経て、阪神の労働事情調査に赴く。
- 1899年(明治32) 『日本之下層社会』『内地雑居後之日本』刊行。新聞社を退社。
- 1903年(明治36) 農商務省より『職事情』が刊行。
- 1910年(明治43) 『明治富豪史』刊行。
- 1911年(明治44) 『凡人非凡人』刊行。
- 1912年(明治45) 殖民事情調査のためにブラジルへ渡航。
- 1913年(大正2) ブラジルから帰国後、『南米ブラジル案内』刊行。
- 1915年(大正4) 6月3日、東京小石川区にて死去。享年44歳。

## 参考文献・横山源之助を詳しく知るために

- 黒田源太郎 1933『炉辺夜話』
- 横山源之助 1949『日本の下層社会』岩波書店 1985年改版
- 立花 雄一 1965『或る一つの星の導くもの—横山源之助の業績と生涯—』(2003年に魚津市教育委員会 復刻)
- 立花 雄一 1979『評伝 横山源之助』創樹社
- 立花 雄一 1985「横山源之助小伝」『日本の下層社会』岩波書店
- 立花 雄一編 2000・2001『横山源之助全集』1・2巻・別巻1 社会思想社
- 立花 雄一編 2004～2007『横山源之助全集』3～9巻・別巻2 法政大学出版局
- 立花 雄一 2015『横山源之助伝』日本経済評論社

## 横山源之助と魚津

1871(明治4)生～1915(大正4)没

明治・大正のジャーナリスト  
社会学研究の第一人者

1871(明治4)年に魚津町の網元(漁師)の子として生まれ、同町金屋町の左官職人であった横山伝兵衛の養子となった。魚津町の明理小学校(旧大町小学校)に通い、卒業後は同町神明町の醤油店を営む澤田六郎兵衛宅へ奉公に出た。その後、富山県で最初の中学校である富山県中学校(現県立富山高等学校)に一期生として入学する。この時、魚津からは源之助のほかにも中村助松、岩崎文次郎、五島茂(後大島)ら7名が同校に入学している(黒田 1933)。ところが翌年に岩崎、五島とともに中学校を中退して上京。弁護士を志して英吉利法律学校(現中央大学)で学び、弁護士試験を受けるも失敗が続いた。この頃に二葉亭四迷を訪ね、やがて松原岩五郎らとも交流を図るようになる。



横山源之助  
(魚津市立図書館蔵)

弁護士をあきらめた源之助は新聞社に入社する。以降、「天涯茫茫生」、「有磯漁郎」などのペンネームで数々の著作を残す。代表作である『日本之下層社会』は、「日清戦争後に遂行されたわが国の産業革命期における、新旧下層各層の生活・労働状態を、客観的かつ総合的にあきらかにした社会学の古典である」と評されている(立花 1985)。

1899(明治32)年、『日本之下層社会』と『内地雑居後之日本』刊行後に魚津に帰郷する。同年、新聞社を退社する。魚津では小川寺の心蓮坊に滞在して静養生活を送るが、翌年には農商務省の囑託になって上京し、当時の工場や職員の事情について調査を行った。その後、海外の殖民事業に関心を抱き、調査のためにブラジルへ渡り、帰国後に『南米ブラジル案内』を刊行する。

源之助の著作は、法政大学の立花雄一氏(魚津市出身)の編集による『横山源之助全集』(全9巻/別巻2 2000～2007年)に五百数十篇が収められている。数々の著作の中には、代表作『日本之下層社会』に収録された作品をはじめ、魚津に関するものもある。

- ・「貧しき小学生徒」(1894年・全集第9巻) 魚津を題材にしたと思われる小説で、源之助最初の著作(当時23歳)である。源之助が小学生の頃の様子を書いたものとされている。
- ・「世人の注意を逸する社会の一事実」(1897年・全集第1巻)

1889(明治22)年の米価の高騰に対する救済策について、魚津に存在した貧民救助の制度を紹介している。

- ・「村落生活」(1900年・全集第3巻)と「田舎だより」(1901年・全集第3巻)

1899(明治32)～1900(明治33)年の帰郷中を題材としたもので、小川寺の心蓮坊で静養中の出来事などが記されている。

このほか、「地方貧民情況一斑」(1898年・全集2巻)、「蜃気楼と海女」(1906年・全集4巻)などがある。



『日本之下層社会』  
1899 教文館

## 魚津文庫の設立

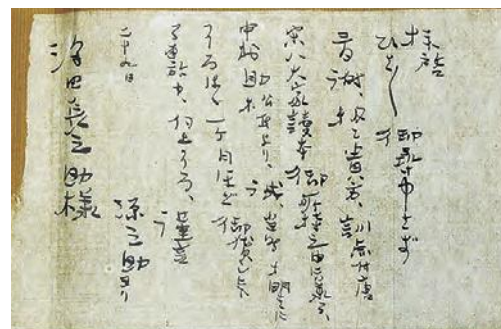
1900(明治33)年4月、「魚津文庫設立趣意書」が出された。発起人には、先の澤田六郎兵衛(当時、魚津町長)や医師、政治家などをつとめ、町の名士であった阿波加脩造のほか12名が名を連ね、魚津静養中の源之助もその一人であった。5月9、10日付け富山日報に、「有磯漁郎」名で「魚津文庫の設立を喜ぶ」と題した記事が掲載される。魚津文庫はその後、名称を変えながら、現在の魚津市立図書館へ受け継がれている。



源之助が滞在した小川寺の心蓮坊

## 源之助の資料

魚津市立図書館には源之助の葉書がある。ブラジルでの殖民調査のため海外渡航中であった源之助が、娘の梢や長い付き合いである松原岩五郎らに宛てたものである。また、魚津歴史民俗博物館には源之助の手紙がある。宛て先は奉公先だった澤田家の長之助。文中の中村助松は富山県中学校の同期である。これらは源之助の筆跡が確認できる貴重な資料である。



源之助の手紙(魚津歴史民俗博物館蔵)

拝啓 ひさく御尋申さず多謝、扱て貴方、訓点付唐宋八大家読本御所持之由に承る中村助松氏より、誠当時才明きにそろはゞ一ヶ月ほど御貸し被下間敷や、伺上そろ  
二十九年 源之助ヨリ  
謹言  
沢田長之助様

## 源之助の顕彰碑

市内の大町海岸公園と新金屋公園には、横山源之助の顕彰碑が建てられている。元々は二つとも新金屋公園にあった。前者は1964(昭和39)年に建立、2008(平成20)年に大町海岸公園に移設されたもので、「社会福祉の先覚 横山源之助先生」と記されている。後者は1987(昭和62)年に建立、「郷土の生んだ先覚者 横山源之助の生涯」と題して解説がある。



新金屋公園の石碑  
(魚津市新金屋1丁目)



大町海岸公園の石碑  
(魚津市本町1丁目)